

わたしの昭和史「国民学校時代をふり返って」

額田 哲彦

▽生まれたころの世の中▽

一 おぼろ月

芦屋に生まれる。

わたしは、昭和一〇年五月生まれの四人兄弟の末っ子です。生まれた所は、兵庫県芦屋市津知町一の坪九二番地の借家でした。わたしが、芦屋に生まれと言えば、ほとんどの人に、良い所にお生まれになったんですね、とあたかも私が金持ちのぼんぼんであるかのような羨望の目で見られました。それは全くの誤りですと、誤解を解くのうんざりしていました。現在の日本は「光と陰」「格差社会」といわれていますが、当時の芦屋は、文字通り貧富の差の激しい社会そのものでした。ブルジョアと呼ばれる少数の超金持ち層と、明日の生計も立てることが苦しい我が家のような多くの貧困層に分かれた明確な経済的階層社会でした。この貧富の差の激しい階層社会が、子どもであった私にも色々な面で大きな影響を与えました。我が家の経済は苦しく、母親もお金持ちの家庭へ女中奉

公しており、私は母親に連れられて、お金持ちの台所の隅で、気兼ねをしながら幼少時代を過ごしました。帰りの阪神電車の芦屋駅から夜遅く帰る途中、母はよくわたしをおんぶして子守歌を歌ってくれました。その時の母の背中の子守歌を聞きながら見た春のおぼろ月を、忘れることができません。

もう少し世の中を広く見れば、私が生まれる以前から日本は、満州事変(昭和六年)、盧溝橋事件(昭和十二年)を起こし、中国侵攻をしており、鉄砲・大砲や戦車のきな臭い匂いがする日中戦争の世の中でした。

二 昭和一六年二月八日

暗記の苦手の私でさえも、この日だけは忘れることができません。この日は太平洋戦争の始まった日です。わたしは、三つの歴史的放送を聴いた一人です。一番目は、二月八日の大本営発表「今朝より西太平洋上にて日米は戦闘状態に陥いれり」の旨、二番目は、八月十五日の玉音放送「天皇のポツダム宣言(無条件降伏)受

諾」、三番目は、「天皇の人間宣言」の放送です。

この二月八日の放送は、「帝国、米英に宣戦を布告し、布哇米艦隊と航空兵力を痛爆す。国民は、聖旨を体し舉国一致し奮起せよ」の旨のものでした。六歳のわたしには、勿論詳しいことは解りませんが、兎に角日本は外国と戦争をするのだということは理解できたことを覚えています。その日から、大東亜共栄圏・東條英機・非国民・打ちてしままむ・倒せルーズベルト・鬼畜米英・一億一心・兵隊さんのお陰です・神国日本などの言葉が、日常的に大人は無論、子どもの世界にまで使われるようになりました。そしてこの日以後教科書・新聞、雑誌などが、戦時色一色に変わっていったのです。

三 国民学校

国民学校には、それまでの尋常小学校から国民学校初等科に改称されたばかりの一年生として入学しました。昭和十七年四月でした。

入学した国民学校は、芦屋市立精道小学校で当時としては大変珍しい鉄筋コンクリートの校舎が一棟と木造校舎がありました。戦後訪れたときには、木造校舎は全焼し、この校舎だけは残っていました。正門前には、今上両陛下のお写真を安置した奉安殿と何故か肉弾三勇士の銅像があり、それに対しみんなは脱帽・礼をして校内に入らなければなりませんでした。そして紀元節などのことある時に、校長先生より肉弾



この写真と同じような像が当時の芦屋精道小学校の正門前にあった。<http://www.asahi-net.or.jp/~ku3n-kym/sonota/nikudan/nikudan.html>

三勇士（日本最初の軍神）と軍神梅林中尉の話
を聞かされたものでした。

注 肉弾三勇士

「満州事変、肉弾三勇士と讃えられた三名の兵がいました。歩兵の突撃路を開くため、一本の爆薬筒を三人で抱えて、敵前数メートルの鉄条網を爆破に身をもって飛び込み爆死。軍部はこれを脚色し軍神として報道した。しかしそれは嘘で、戦後、工兵隊のミスで導火線が短かったため、途中で爆発したものと知った。ひどい話だ。（昭和七年）」<http://kiuchi.jpn.org/nob2/g60.htm>



<http://kiuchi.jpn.org/nob2/g60.htm>

入学して驚いたことは、金持ちの子どもの下
男下女の付き添いが多かったことです。その人
たちは教室の後ろに立って自分の坊ちゃんを咳
をすれば背中をさすり、昼食時には豪華なお弁
当を食べさせておりました。一日遠足の時など
は下男下女の数が普段よりも相当増えたのを覚
えています。父兄会の時には、校門付近には人
力車がたくさんあり、それに乗った絢爛豪華な
着物をきたお母さんたちが来られました。わた
しの母親はもんぺをはき、白のエプロン掛けの
姿で何時も教室の後ろの隅の方にいました。こ
の親の服装の違いを見ただけでも、当時は今よ
りも遙かに明確な階層社会であったということ
が子供にも解りました。

わが家はクリスチャンの家でした。父も母も

熱心なクリスチャンでした。両親は教会で知り
あい恋愛結婚したのではないかと想像していま
す。キリスト教は敵国の宗教であり肩身が狭い
思いをしました。わが家に、わたしが小さいと
きから省線の芦屋駅近くの教会のご婦人の塚本
牧師が来られていました。わたしは時々親に連
れられ日曜礼拝に行くのが大好きでした。それ
は教会に行けば、紅茶とビスケットが戴けるか
らでした。まことに不束者のわたしです。

四・臼井先生のじや

臼井先生は、わたしの二年生の担任の先生で
した。先生のごことは生涯忘れません。その後教
職の道に着いたわたしは大きな影響を受かまし
た。精道小学校には、二年生の時より級長制が
ありました。担任の先生が、級長・副級長に成
績の良い金持ちの児童を任命するのが慣行にな
っていました。級長・副級長は学期毎に替わり、
その中で一学期の級長が最も権威があつたので
した。二年生の時の最初の全校集会で、級長の
任命式が行われました。名前を呼ばれた児童は、
校長先生の前に出て赤の襷をもらうのです。
そしてわたしの級るときには、臼井先生より級
長にわたしを、副級長に古敷知子の二人が呼ば
れ、校長先生から赤襷をもらいました。その時、
大きなどよめきが起こったのをはつきりと覚え
ています。

なぜどよめきが起こったのでしょうか。

それは、わたしが、父親がしがない職工であり、母親が女中で働く貧乏人の家庭の子であり、副級長の古藪も貧しい小さな下駄屋の女の子でした。でもわたしは、勉強は古藪と競争で級の中では一番の取り合いをしていました。

臼井先生は、貧乏であっても勉強のできる児童を選んだのでした。誤解の無きように、ここでわたしは自分の自慢話をしようとしているのではなくありません。わたしは、臼井先生の勇気をたたえ、尊敬していることを云いたいのです。前述のように当時の芦屋は、金持ちの富裕層が

芦屋市の政治・経済・教育などの全般に大きな影響を与えていました。そのような風潮に真っ向から反し、金持ち層以外の餓鬼を級長に選ぶことは、前代未聞のことだったと思います。臼井先生は、この風潮に対しおそらく自分の職を

かけ、自己の良心に従がい、この勇氣ある行動をとられたと思っています。この勇氣は、昨秋小豆島の二十四の瞳の教室を訪れたとき、出征する教え子に「戦争なんかで絶対に死ぬるのではないよ、必ず生きて帰るなさいよ」といわれた大石先生の勇氣に通じるものがあると思いました。二学期の級長には金持ちの坊ちゃんが任命されましたが、その子は号令一つ掛けることができず、わたしが代わりにする次第でした。その後間もなく、臼井先生は結核でお亡くなりになりました。わたしも後に教職の道につきましたが、臼井先生の教えを大切にしておこ

た積もりです。

五. 当時の好きな食べ物など

▽阪急大食堂のお子さまランチ

・一銭焼き（お好み焼き）

・木の葉井（国道のお店の）

▽当時の読んだ本

『ノラクロ』 『荒木又衛門三十六人切り』

『宮本武蔵』 『冒険だんきち王』

▽見た映画

田中絹代と上原謙・板東妻三郎主演のもの

▽利用した交通機関

阪神電車・阪急電車・省線電車（現JR）

国道電車（現在は無し）

六. 戦況について

年表によれば

昭和十六年十二月八日 布哇奇襲攻撃

同年十二月二十五日 香港の英吉利軍降伏

昭和十七年一月二日 比島マニラ占領

同年二月十五日 シンガポールの英吉利軍

降伏

同年三月九日 ラングーン占領

同年三月九日 ジャワの蘭印軍降伏、

同年五月七日 コレヒドールの米軍降伏・

珊瑚海海戦で大勝利。

日本の緒戦のめざましい勝利はここまでであった、と知られています。丁度わたしが一年生

になってわずか一ヶ月月くらい後までが勝利の美酒の時でした。

戦局の一大転機となった運命のミッドウェー海戦は、六月五日～六日に行われたのでありました。それ以後は米軍を中心とする連合国軍の大反攻が激しくなり、一步一步と、将棋倒しのよう

七. 空襲

首都東京が第一回の空襲を受けたのは昭和十七年四月十八日のことでありました。わたしが一年生になってから直ぐのことです。当時は日本の緒戦の勝利の余韻が残っていたので、大したことはない子ども心にも思っていました。おそらく大人も同様であったと思います。しかし昭和十八年になると、日本の旗色は急速に悪くなっていきました。

ガダルカナル島の全面撤退（同年四月）に始まり、アッツ島玉砕（同年五月）、次ぎに硫黄島玉砕（昭和二十年三月二十五日）、米軍はこの時点で空襲による本格的な日本本土侵攻の基盤を確立することができました。その後怒濤のごとく下町を焼き尽くした東京大空襲（同年三月）、米軍沖繩上陸（同年四月）、大阪大空襲・神戸大空襲、広島（同年八月六日）特殊爆弾Ⅱ原爆投下）・長崎（同年八月九日）特殊爆弾Ⅱ原爆投下）、ソ連軍の満州侵攻（同年八月六日）、天皇のポツダム宣言受諾の玉音放送による敗戦（同

年八月十五日)となるのであります。

先ず、この頃のわたしは国民学校3、4年生になっていました。当時の国民学校の生活はどうであったかを記しておきます。

空襲・燈火管制・防空頭巾・防空壕・疎開・わが家の焼失・敗戦・転校などの言葉が浮かびます。

空襲とは、B29爆撃機を中心とした焼夷弾と五〇〇キロ爆弾・一トン爆弾の大量投下と、グラマン戦闘機による機銃掃射などを指します。要するに、数十機から一〇〇機を越える大編成の航空機による地上の全てのものを破壊し、焼却し、死亡させる戦闘行為を指します。

昭和十七年頃、けたたましいサイレンがウウーと空襲警報を知らせ、下校の途中だったと思いますが、六甲山の上を戦闘機グラマンがスイスイと飛んでいるのを見たのが、敵機を見た最初でした。それはとても軽やかに、美しく見えました。芦屋の浜辺に設置されていた日本の高射砲が、パンパンと撃ったのですが、全然命中しなかったのが印象にあります。

八. 大阪大空襲

昭和十九年十二月に初空襲を受け大阪は、二十年三月十三日の夜、九十機のB29爆撃機の大規模な焼夷弾攻撃を受け、その後も数十機編隊の来襲が続き、大阪の町は灰燼に帰しました。空爆回数は五〇回以上と推定されています。

九. 神戸大空襲とわが家の焼失

昭和十七年四月に、B25による初空襲を受けた神戸は、二十年二月四日B29・八十五機が、神戸の川崎・三菱両造船所を目標に爆撃したのを皮切りに、二月中に二十二回の空襲を受けました。三月十七日には、B29・六十機の空襲を受け、そしてとどめは、六月五日のB29・三百五十機が西宮垂水間を絨毯爆撃をし、被爆率は一〇〇パーセントとなった空襲でした。このときの空襲で、芦屋のわが家も焼失しました。

わたしは、この大阪・神戸の大空襲を体験しています。わが家から、東を見れば大阪炎上の大黒炎、西を見れば神戸の炎上の大黒炎で、空が真っ黒になり、国道2号線には消防自動車がいまさに右往左往していました。丁度そのころ、わが家の近所に一トン爆弾が落とされ、もの凄い破裂音と爆風音を体験しました。玄関で畳を頭に乗せ、母親にしがみついて、爆死の恐怖感を母と共に体験しました。正に生きた心地がしないとは、このことを指すのでしょうか。かなり時間が経ってから、空から大きな庭石などが落ちてきて、これも又怖かったです。後で爆弾の落下場所に行きましたが、そこには、大きな池ができていました。あらためて、一トン爆弾の威力の凄さを知りました。そして、わが家と東の家の二軒は、幸運にも倒壊を免れましたが、

爆風のため近所の家は、殆ど転倒し、破壊されていきました。この体験と、B29の数十機の三角形編隊を、連日のように見上げるたびに、日本はこの戦争に負けるのではないか、という気持ちに中心に芽生えてきました。

十. 疎開について

疎開には縁故疎開と集団疎開の二つがありました。戦況の悪化に伴い、昭和十八年に文部省が学童疎開促進の計画を発表しました。それは縁故疎開可能なものはとりあえず疎開せよ、とのお上のお達しでした。

縁故疎開とは、都会から離れた農山村の地域に受け入れてくれる親族・縁者がある者が、そこを頼ってする疎開を指します。縁故疎開が可能なのは、金持ち富裕家庭の子女でありました。一般庶民は、そのような受け入れ先は見つからず、空襲に曝される都会に残らざるを得ない状態でした。

昭和十九年六月東条内閣は閣議で、縁故疎開のできない国民学校児童の集団疎開を決定しました。三年生から六年生までの児童が対象で、昭和十九年と二十年の両年にまたがって実施されました。

十一. 岡山の頼久寺への疎開

二十年の六月頃、四年生であったわたしは、精道小学校の集団疎開の一員として、見知らぬ

岡山の頼久寺というお寺を目指して、省線の芦屋駅を出発しました。文字通り、煙突から煙を出す蒸気機関車に引つ張られ、生まれて初めての十時間を超す長い長い汽車の旅でした。汽車の汽笛を聴けば、疎開を思い出します。夜、伯備線の高梁駅に到着し、翌日頼久寺に着きました。以下、簡単に頼久寺で体験した生活を羅列します。

▽最初の作業

山門横の便所作りでした。穴を掘って、むしろの壁を掛ける簡易便所でした。以後、何をやるにしてもすべて学童作業でした。

▽勉強

近所の女学校でした。木の床張りの掃除の行き届いたきれいな教室で勉強をしました。この教室に行くのが楽しみでした。今思えば、高梁順正女学校ではなかったかと思えます



頼久寺

<http://www.fmkagawa.co.jp/yomu/small/small02.htm>

▽食事

朝・・・大麦だけのお粥一杯

昼・・・豆かす・南京・すいとん・赤い小麦の皮のご飯(米粒無し)

夜・・・昼に同じ

今思えば、ろくな食べ物はなく、何時も空腹を抱えていました。豆かすには飽き飽きし、このため、その後わたしの大豆嫌いが高校卒業頃まで続きました。

人間は卑しい者で、朝飯の時は、我先に机の上のお粥の中に箸を入れ、なるべくどろっとした粘りけのある丼を取り合ったものです。また南京や芋ができれば、少しでも大きそうなものを奪い合いましたものです。

当然児童の中には、栄養失調になる子も出てきます。仲良しの山崎くんが、骨皮筋衛門になり、箸も持つ力さえもなくなり、遂に他界しました。またもや、死の恐怖を疎開先で味わうことになったのです。

▽散髪・入浴・風

散髪

散髪のバリカンにはびっくりしました。生け垣などを刈る大きな鎌のようなものの刃の部分がバリカンになったやつです。児童は一列に並んで先生が両手で木の葉を刈るように髪の毛をばさばさと切るのです。

入浴

一週間に一回ぐらい高梁の町のお風呂屋さん

を借り切り、又一列になって、時間制限の下に入浴しました。

風(しらみ)

疎開経験者の人から、必ず出てくるのは、風と食い物の話です。

私たちも、当然風に苦しみました。風に噛まれると、強烈なかゆみが軀を襲います。何故だろう、とシャツを脱ぐと、風がぞろぞろと這って出てくるではありませんか、米粒の半分くらいのから米粒大のがずらりと一列に並んでいたのを最初に見た時にはびっくりしました。白色で体の中央に黒点があります。人の血を吸うと、この黒点が大きくなります。黒点の大きいやつを指でつぶすと、ぶちゅーと血が飛び出していきます。この風という奴は、シャツの縫い目にあるところに集団発生します。縫い目に沿って一列に数十個の風の卵がありました。それを見ると、大きくならない前にブチブチと潰したものです。丁度人間の体温ぐらいが適温なのでしよう。直ぐ大きくなります。よくシャツの袖口より風が這って出てきたものです。風は、蚤のように飛んだりはしませんが、集団発生します。発生原因は、体と衣服の不潔と不衛生な生活です。洗濯も入浴も回数が少なく、その上、石けん不足の状態なので、当然のことなのです。風に対する対策は、指で殺すということではどうにもなりません。なにしろ相手は、集団大量発生するのですから。頼久寺の先生方は、大き

な釜を借りてこられ、熱湯を沸かして、その中に衣類を放り込む集団殺虫作戦を取られました。このような光景は、当時の国内の至る所で撮られた写真で見ることがあります。銃後の国民の大多数は、虱にも悩まされたのです。

▽八月十五日の玉音放送

当日は、わたしは、おなかが痛くて別室で寝ていましたが、先生より、今日は特別放送があるので、全員大広間（本堂）に集まるようにいわれ昼前に集まりました。

本堂には、ラジオが一台置かれており、全員正座の号令の下に、特別放送を聴きました。この放送が、玉音（現人神であらせられる天皇の声）でありました。多分国民の殆どは、天皇の肉声を聴くのは初めてだったろうと思います。放送の内容は、ザーザーと雑音が多くて、わたしには理解できませんでした。ただ先生方が、大声を出して泣かれたので、これは重大放送なんだと思いました。

先生が、後から放送の内容を説明してくださいました。日本は、米国に無条件降伏しました。つまり大東亜戦争に負けました。米国は奴隷を持つている国です。何が起ころうとも、驚かずに、一致団結して行動しましょう、の様なお話だったと思います。

わたしは、否私たちみんなは、もう戦争はないんだ。空襲で殺されないんだとの安心感と、これからはどのようなようになるのだろうかという不

安感が、心の中で渦を巻いていました。

それからしばらくして占領軍（進駐軍）・特殊爆弾（原子爆弾・ピカドン）・マッカーサー元帥などの言葉とそれに関する情報も流されるようになりました。

付記すると頼久寺は、小堀遠州作の江戸初期の名庭園と言われていますが、そのようなことも全く知らされておらず、庭園自体の記憶はあまりありません。

親の迎え

八月末頃だと思えますが、突然両親が、頼久寺に迎えにきてくれました。もの凄い嬉しさがこみ上げてきました。ゲートル姿の父ともんぺ姿の母の二人が現れた時は、本当に天にも昇る気持ちでした。後に二十年ほど経ってから、わたしは頼久寺を訪問し、お寺の急な階段の上に入った親父とお袋の姿を、まさまじと思いい出し、涙を流しました。

そして芦屋のわが家は、阪神大空襲で焼かれ、今は邑久郡の父の遠縁のおじいさんの所に疎開し寄生している旨の話を書きました

十二、岡山の生活の始まり

高梁からの帰る途中、四十五年の空襲で焼失した岡山の街を車窓から見ながら、山陽本線の万富駅に下車しました。いよいよこれから岡山での生活が始まるのです。着いた万富駅の近くで桃を食べました。あまりの美味しさに腹一杯

食べました。そして万富より二里半もの道を歩き、ようやく行幸村（現：長船町）の福岡の遠縁のおじいさんの家に夜着きました。その晩、桃を食べ過ぎたのでしよう、激しい下痢をしたのを覚えています。

当時の農家の多くは、母屋と納屋の二棟造りでした。私たちが住んだのは、納屋の馬小屋（内厩舎＝うちまや）の一部でした。朝起きると、馬が二頭、私たちが寝ている上から見下ろしていたのには驚きました。馬の糞尿の臭いでとてもそこにはおれませんでした。数日後納屋の馬小屋と一壁隔てた物置に四畳の畳をしいて一息つきました。以後この部屋の生活が十年以上続くのです。井戸と便所は隣家との共同使用で、不潔そのものでした。それらを気兼ねをしながら使わせてもらいました。

毎日釣瓶でバケツに水をいれ、それを風呂に入れ、薪を割って風呂を沸かすのがわたしの日課でした

十三、行幸小学校に転校

わたしは行幸国民学校の四年に転校しました。受け入れた生徒から、わたしは激しいいじめを受けました。いじめの理由は先ずわたしが都会の子どもであつたこと。異質な子どもに見えたのでしよう。その上勉強が良くできたこと。ああいうお、九九ができない子が多く、学力差は二年生分くらいは、あつたと思います。農業が

ほとんどできなかったこと。工作の草履作りが出来なかつたこと。体操が下手であつたこと、跳び箱が、どうしても怖くて跳べなかつたこと、鉄棒の逆上がりはようやくできたが、逆立ちはどうしてもだめだつたことなどがあげられます。兔に角、田舎の子どもとわたしとの体力差は、

大変大きく歴然としていました。この体力差、運動能力の差はどうしてできたのか。その最大の理由は食いが違つていたことです。わたしの食事は、南瓜、薩摩芋とその茎、蛙・バッタ・すいとん、豆かすなどでしたが、彼らの食事は、銀しやり（白米）か麦と芋入りご飯でした。わたしの昼飯は芋か南瓜で、それすらも毎日持つて行けませんでした。痩せこけたわたしと彼らの体力差、運動能力差が生じるのは当然です。彼らの食事はなんと贅沢なことよ、とわたしの目に映りました。彼らは戦争の苦しみを、痛みを知らない連中だと、わたしは子どもながら感じました。当時のわたしの立場をあらわす典型的な事件を紹介しましょう。

ある日の昼食時、わたしは昼食の薩摩芋の包み紙の当時の合同新聞を読みながら、薩摩芋を食べていました。すると子どもたちが、こいつは芋ばあ食いよる、牛みたいな奴だ、しかも大人の新聞を読みやがる。生意気だ、やつちまえ、と袋だたきに遭いました。このような残酷なことは日常的によく起こりましたが、わたしは泣きながら、いまに見ておれ、きつと将来やり返

してやるからなと、心に誓つたものです。当時の疎開児童は、多くの転校先でこのようにないじめにあつたようです。

十四：当時の世相

闇市「非合法市場」

敗戦直後は、日本は深刻な食糧不足とインフレに悩まされました。国民生活は食べる物も何もない焼け跡のルンペン生活をしていました。これは本当に深刻な状況でした。当時親父は、それまでの勤め先であつた軍事工場が空襲のため焼失し失業の身でした。父は、生計のため田舎の農産物を仕入れ、神戸の闇市に運び、そこで売りさばき、そして衣服や靴などを仕入れ、岡山に運び、それを売つてなにかの儲けを繰り返す闇商人をしていました。わたしはその時、親父に列車の客席の上にある荷物置き場にひよつと放り上げられて、三宮の闇市に行ったことが度々あります。そこで生まれて初めて見た外国人、それも英米仏などの色とりどりの軍服を着た外国の兵隊さんでした。ガード下の靴磨きの少年には、非常な親近感を持ち、同じ仲間だなーと思つたものでした。闇市は、私にとつて楽しい場所でした。

占領軍は、日本の食糧難を少しでも緩和するために、ララ物資を小学校に配布しました、中身は脱脂粉乳でした。大鍋で炊かれたその粉乳を行幸小学校で飲みましたし、例の虱退治のた

めに、頭からDDT（白い粉の殺虫剤）を散布されたことも覚えています。遠くに進駐軍のジープを見つければ、チョコレート、チューインガムと叫んで追つかけたものです。

十五：田圃との戦い

おじいさんの家は小作でしたが、田圃が数反ありました。その田に、夏は稲作、冬は麦作をしていましたが、当然農作業の手伝いをしなければなりません。それまで鎌一つ、鍬一丁持つたことがないわたしと母には本当に苦しい作業でした。今のように機械化され、農薬使用の農業ではなく、全ての作業が手作業の肉体労働でした。田植への準備に始まり、母と泣きながら夏の炎天下、田圃の中をはい蹲つて、手で田草取りをしました。鎌で一株毎刈る稲刈り、足でする稲穂こぎ、その上、小学校五年生より馬による田圃の畝造りなど、全てこれでもか、これでもかというほど、多くの苦しい重労働でありました。都会育ちの私たちには、農作は、まさに命をかけた戦いでした。全て人間の手作業による肉体重労働でした。わが家にとつては田圃の農作業はまさに大きな戦いでした。父は、闇商人の後、博労に雇われ、牛の競り市から競り市へと牛を運ぶ牛追いのしごとになりました。これも本当に重労働でした。わが家のごとく当時の国民は、生きるために、文字通り必死に、何でもして頑張つたのです。

十六、兄の戦死

わたしどもがまだ芦屋にいた昭和十八年頃、長男芳彦兄ちゃんに岡山四八師団に入隊せよ、との赤紙召集令状が着き、兄は出征しました。兄と最後に会ったのは、入団した半年頃、四八師団練兵場（現岡山市の津島総合グラウンド）でした。当時出征兵士の家族面談の機会は、たったの一回だけでした。

当時の練兵場は草原で、兄たち兵隊さんは、現在の岡山大学の正門通りを整理して入っていました。解散の号令の下、私ども出征家族が待ち受けている場所に、跳ぶように走ってきた兄の姿を思い出します。はつきり覚えているのは、面談の途中に、事前に知らされていた大砲の空砲が打たれ、短時間の避難訓練がありました。

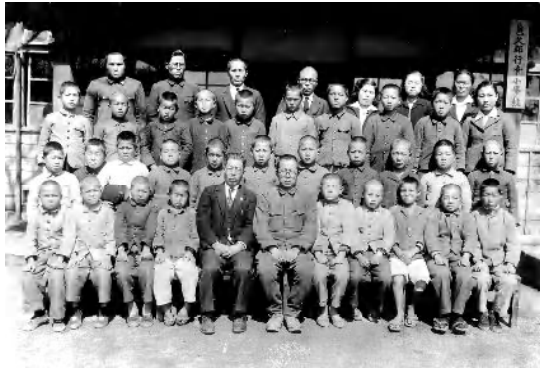
全員伏せの命令が発せられ、この伏せの間に家族と兵士の間に、手短かに会話をし、互いに持ってきた物を差し出し合ったのです。これは当時の軍隊の粹な計らいでした。芳兄ちゃんは、哲彦これを人に見られないように持って帰れと、当時は手に入らなかった氷砂糖の一杯入った袋をくれました。これが最後の思い出です。この袋には、兄の弟への愛情が一杯詰まっていたと感じました。今氷砂糖を食べる時には、このことを思い出します。その後、兄は、満州の牡丹江に移動し、そこから比島（フィリピン）に移動しました。

戦死の公報が役場から昭和二十一年頃届きま

した。兄は、比島のブンカンという場所で戦死したそうです。親父とお袋の三人で、吉井川の葦田橋の宇野バス停まで出迎えました。お坊さんより白木の箱を受け取りましたが、中には戒名を書いた小木片が入っていただけでした。熱心なクリスチャンであった両親は、勝手に仏式にされたと激しく怒っていました。

長男の死は、母にもすごい悲しみを与えました。半年くらい毎晩激しく泣き通しました。

風呂場で泣き、裏の畑で泣き、人目もはばからず泣いていました。こんなに我が子のために涙を流す母親の姿は、他には知りません。本当に我が子思いの母でした。親父は、天皇がもう三か月早くポツダム宣言を受託しておれば、家を



行幸小学校卒業式

下段右から4人目が私です

焼かれたり、長男を失う目に遭うことはなかったのにと嘆いていました。全国の数百万家庭の親は、同様の嘆きを胸に抱いたのでした。

その後わたし自身も、兄が入団した兵舎の跡地を利用した岡山大学に入学するとは夢にも思っていませんでした。しかし岡山大学はわたしにとっては、兄とわたしを結ぶ特別な思いのする大学でした。

十七、民主主義の世の中へ

昭和二十一年十一月三日、新憲法（昭和憲法）が公布され、国民学校は昭和二十二年三月まで、それ以後は六三三制の学校制度が実施され、新制中学・新制高校が誕生しました。わたしは新制中学の二期生で熊南中学（現：長船中学）に入学しました。その頃墨が塗られた教科書を利用するようになりました。軍国主義は駄目だ、これからは民主主義の世の中になるんだ。そして天皇も昭和二十一年一月一日に人間宣言を発し、自分は「神話ト伝説ニ依リテ生ゼルモノニ非ズ」と自己の神格を否定し、現御神（アキツミカミ）現人神（アラヒトカミ）より普通の人間天皇になりました。このようにして、世の中は次第に変わっていったのです。学校教育や教師の言動も大きく変わって行きました。ここで地図について付け加えておきます。戦時下の教室では、日本の固有の領土を表す色として赤色が使われ、満州のように日本が侵略して占拠し

た地域は桃色が使われた地図が掛けられていました。(手元に資料あり)従って戦争当初の日本が勝利を得ていた頃は、この桃色の地域が増えていったのです。敗戦後私たちが目にした地図は、現行のものであります。私たち学童は、台湾や朝鮮半島は、元々日本固有の領土と教えられていたもので、現在の地図を見てショックでしたし、敗戦という事態を改めて認識した次第です。これで小学生くらいまでのわたしの体験は、ひとまず終わりにします。

十八、 当時を偲んで今思うこと

B29より投下される一トン爆弾、グラマンの急降下する金属音と機銃掃射の銃撃音、そして焼け野が原と豆かす・すいとん、虱などの原風景が、わたしの精神の中に埋没されています。それまでをふり返ってみれば、戦時下の国民生活は、一言で言えば、死と隣り合わせの生活であつたといえます。

この原風景から出発するのが、わたしの敗戦後の戦後意識であります。本土空襲という苛烈な体験を通過し、八月十五日という敗戦の時点に到着したわたしのような者の抱く戦争体験に基づいた戦争観と、本土空襲の苛烈な現実から幸運にも免れることによって、観念として敗戦に到達した人たちの抱く戦争観から生じた戦後意識の間に、決定的な落差があるとわたしは思います。戦後意識は二分されているとわたしは

考えています。つまり都市居住者と開拓移民の引き上げ者を主体とする罹災体験者たち(グループA)と農村郡部における非罹災体験者たち(グループB)との間における落差です。重複しますが、空襲に象徴される様々な口に表現できない戦争の悲惨な現実を通過した戦争体験者たちと、観念としてのみ戦争を受け止める以外になかった戦争体験のない者たちとの間に横たわる落差は、決定的に存在していると、わたしは思います。

このグループAの人たちは、異論があることは承知していますが、敢えて云えば、すいとん派・焼け跡派であり改憲反対派であり、それに対してグループBの人たちの白米派は、安易な改憲派であり、再軍備賛成派であると思つていきます。しかもグループAの人たちの人口は、どんどん減少しています。世論調査の無関心派はグループBに属する人たちだろうと推定されます。まことに憂慮すべき事態が今の日本の姿だと思えます。さらにいえばこのようなわたしの考えを生み出す自分の精神の深層には、戦時下の食い物に対する恨みという魔物が、時折蠢くめくのかもしれません。

自衛隊が発足した頃に誰しも考えた日本の再軍備論を、もう一度を真剣に考えるべき時代です。

今一度確認したい。昭和憲法は、当時の国民が焼け野が原でもう戦争は絶対に嫌だという戦

争絶対否定と平和の希求の国民の祈るような願いの産物であり、宝物であつた筈です。今日の状態は、国民の多くは、平和漬けになつたためか、あの焼け野が原の皮膚感覚が失われ、コンピュータと為政者にあやつられ、長い物に巻かれるとの処世術を身につけた大衆となりつつあるのではないかとさえ感じるがあります。核武装をすることが、日本の安全と平和を守ることになるとする現実論と、それに対して現行憲法の平和主義は人類の理想を示すものであり、日本はこの道を進むべきだとする理想論、この両論を今一度じっくり考える必要があります。特に理想論と言われている思想は、本当に非現実論であるのかどうか、根本的に検討する必要があります。

防衛庁が防衛省に格上げされ海外派兵が可能となり、今後憲法が改正されて国民徴兵令が出来る上がつたときの世の中を描いてみてはどうでしょうか。

今の自衛隊がイラクに派兵されたとき、一発の弾丸も発射しなかつたというニュースがありました。これは憲法九条が、日本は武器行使を抑制したためだと思つています。もし改憲されたとすれば、自衛隊に入隊する人とその家族は、今までは違つて我が子の戦死の危惧観を、かけがえない命の重さを、感じざるを得ないのではないのでしょうか。

(ぬかだ てつひこ)

資料

心に残る当時の思い出の歌

「題不明」

肩ヲナラベテ兄サント今日モ学校へ行ケルノハ、

兵隊サンオカゲデス。 オ国ノタメニ、オ国ノタメニ戦ツタ

兵隊サンオカゲデス。

「ガード下の靴磨き(宮城まりこ)」

赤い夕日が ガード染めて、

ビルの向こうに 沈んだら。

街にヤネオンの 花が咲く

俺ら貧しい 靴磨き

あーあー夜になっても 帰れない

(台詞)

ねーおじさん 磨かせておくれよ

ほら まだこれぼつちさ 全然しけているんだ

えっ

お父さん 死んじゃった

お母さん 病気なんだ

墨に汚れた ポツケットのぞきや

今日も小さな お札だけ

風の寒さや ひもじさにや

馴れているから 泣かないが

あーあー夢の無い身が 辛いのに

誰も買っては くない花を

抱いてあの娘が 泣いてゆく

可愛そうだよ お月さん

何でこの世の 幸せは

あーあーみんなそっぽを向くんだらう

この唄は当時の戦災孤児の気持ちを表している代表曲です。

「星の流れに(昭和二十二年)」

作詞：清水みのる・作曲：利根一郎

唄：菊地章子

星の流れに 身をうらなつて

どこをめぐらの 今日宿

荒む心で いるのじゃないが

泣かて涙も 涸れはてた

こんな女に 誰がした

煙草ふかして 口笛ふいて

あてもない夜の さすらいに

人は見返る わが身は細る

町の灯影の 侘しさよ

こんな女に 誰がした

飢えて今頃 妹はどこに

一目逢いたい お母さん

ルージュ哀しや 唇かめば

闇の夜風も 泣いて吹く

こんな女に 誰がした

当時の夜の女と言われた女性の哀しみを

表した唄

「ああモンテルパの夜は更かて」

作詞：代田銀太郎・作曲：伊藤正康

唄：渡辺はま子・宇都美清

1 (男) モンテルパの 夜は更かて

つるる思いに やるせない

遠い故郷(ふるさと) しのびつつ

涙に曇る 月影に

優しい母の 夢を見る

2 (女) 燕はまたも 来たかれど

恋し我が子は いつ帰る

母の心は ひとすじに

南の空へ 飛んでゆく

さだめは悲し 呼子鳥(よぶこどり)

3 (女) モンテルパに 朝が来りや

昇る心の 太陽を

(男) 胸に抱いて 今日もまた

強く生きよう 倒れまい

(男女) 日本の土を 踏むまでは

外地の日本人捕虜收容所の人の気持ちノ唄

(MIDI制作：二木紘三)

参考図書

『一億人の昭和史』三・四号